

特定非営利活動法人
柔道教育ソリダリティー

第3回講演会

「清末日本留學生の教育」

と嘉納治五郎」

大手前大学教授 巖 安生

2007年11月27日(火)

於東海大学校友会館

ただいまご紹介にあずかりました巖安生です。

今日は、所望されて話をいたしますけれども、かなり緊張しておるところなんです。と言いますのは、私は日本留学後の後に、日本留学精神史、つまり清朝末期以来の中国人日本留学のことを扱って研究を致しましたけれども、柔道には全くの門外漢。嘉納治五郎先生の名前は上述研究テーマの枠内において触れたが、柔道のことはわからない。そのため、今日の話の為に、夏休みに「回講道館の資料室で、色々調べたりしたんですけれど

ども、あくまで一夜漬けです。から、留学生教育と柔道という接点で話が出るかどうか自信がございません。その自信の無さ、心の緊張を紛らす為にも早速本題に入りたいと思います。

まず、事の始めですが、嘉納治五郎先生、清朝末期の留学生をいつ受け入れ始めたか、どういうきっかけからかという事から始めますと、先生の口述自伝「柔道家としての嘉納治五郎」の中にはこう書いてあります。

つまり1896年、日清戦争の後の年に西園寺公望から相談を受けました。

西園寺はその時、外務大臣兼文部大臣で、彼は清朝の人と日本駐在の公使から相談を受けていました。「十数名の学生を日本のしかるべき教育家の元に送りたい」という事で、西園寺の話は嘉納治五郎先生、その時はもう東京高等師範学

校長〇年目か4年目になっておりますので、彼に話が出来た。それを受けた嘉納先生は、しかし自分は多忙で、もし部下の人にやらせるならば、それでよろしければ、というところで引き受けたのが中国人留学生の引き受けの始めです。

それは、1890年のことで、彼の自伝に述べてありますので、これ以上詳しく触れません。私が思うには、これは中国人留学生来日の潮騒です。背景は日清戦争に敗れて、日本を見直した、それで人を送りました。しかし、清朝末期留学の本波は98年以降です。と言いますのは、1898年、皆さんご存知かも知れませんが、日清戦争の後にロシア・ドイツ・フランスの三国は日本に遼東半島を還付させまして、その手柄顔でこの98年に中国の勢力圏、つまり中国の主権分割を始めました。それで中国は国滅びるといふ危機に直面しました。

と同時に日本も危機感を強めた。つまり三国同盟の勢力がそれでいよいよ強まるのではないかという危機感です。それで一方は危機を救い、国作りのために留学生を送り出したい、一方は自国の持ち株確保、影響力拡張のためにそれを受け入れたいということで、嘉納治五郎先生もこの1898年以降も第一線に立って受け入れの中心人物になりました。

そのことは1896年に十数名をあげた当初、寄宿の塾が作られて名前がなかったのが、1898年の翌99年に正式に亦楽書院と命名された一点からも解るでしょう。最初に受けた十数名(途中脱落者もある)も3年間学業を終わりまして、嘉納先生が表彰され、清朝政府に叙勲されました。そういう事で、嘉納治五郎先生の留学生教育の第一人者の地位が安定したものと

になったわけです。さて1898年をきっかけとする救国とか改革とかが目的の来日が日本留学の本波とすれば、大波あるいは大潮になったのは1902年以降だと言わなければなりません。何故かと言いますと、その前、1900年に中国に8ヶ国連合軍の北京侵攻、日本語という北清事変がありました。それに痛手を受けたのと、間もなくの日露戦争に非常に励まされまして、それ以降は大波という形、堰を切ったように一斉に日本に来了。

これからはロシアに勝つほどの日本のように中国も頑張らなくちゃいけないと同時に清朝も末期になると新政を起す気運も本格化した。それで日本右倣えの風潮が起こり、本当に大波というか大潮になってしまいました。それを受けて皿として立派に受けてしまったのは、この年の初め頃に

出来た嘉納治五郎先生の宏文学院です。という事で、この嘉納治五郎先生のこと、宏文学院すなわち清朝末期の中国人留学生教育本山のことが私の研究の視野に入ったのです。しかし柔道の話を致しますと、さつき申し上げましたように、まったくの門外漢で、私に勇気を与えてくれたのは実は、この一つの本なんです。

山下理事長と奥田会長の対談集『武士道とともに生きる』です。何故私にも興味が沸いてきて話をする自信が出てきたかと言いますと、この一冊は姿三四郎を巡って語られている。皆様の人格形成或いは、柔道人生に果たされた偉い役割を姿三四郎。もちろんそれは実質嘉納治五郎先生のことでもあると思うが、その人物を中心に非常に熱っぽく語られていてこの一冊に私が非常に感銘を受けたのは、今から26年前に東京大学での留学

を終えて中国へ戻ったときに、ちょうど中国全土で姿三四郎ブームが起こっていた頃のことか思い出されたためでもあります。

姿三四郎、日本テレビが1974年に作った竹脇無我が出演したあれ。あれはですね、中国改革開放後、初めての（その前にアメリカのチャンバラ物も掛ったが途中で禁映となった）、しかも外国もの連続ドラマ。それで北京の町は、放映の夜に静まってしまいうほどに、皆テレビにかじりついていました。町には毎日のように、日本語もわからない連中が歩きながら歌っている、それは有名な村田英雄の歌ではなくて誰の歌だったか解りません。皆さん何か印象ありませんか？解からない人達の歌う歌を聴いて、「あつ」、こういう意味か、とますます歌う。「やれば出来るさ、出来なけりゃ」、若者はその精神ロマンにしつかり惹かれていました。

中国の改革開放という事で、鄧小平の呼びかけで、色んな外国ものが入り始めているんですね。それで中国の老成者、年取った人達は「姿三四郎」を見て、ほら見る、あの矢野

先生のように、文明が流入しているも日本を忘れてよろしいんですか？自分の道を忘れてよろしいですか？というよな面に非常に感銘を受けて、それで若い世代と老成者の戦争が起こった、論戦が起こったのですが、お互い皆、我田引水ばかりで、埒があかなかった。しかし、そのとき面白いのは、かっこいい竹脇無我の扮した姿三四郎もさりながら、同時に老成者の矢野先生の風格も非常に感銘を受けましたけれども、さて、この矢野先生がこと嘉納治五郎がまさに中国20世紀初期の新しい教育の大恩人で留学生教育の総本山ということ。そして彼を通して柔道という名前も中国に入ってしまった。その

ことなどは私を含めて知りませんでした。

しかし私たちより80年も前に魯迅先生から、つまり嘉納先生の弟子の魯迅から、嘉納先生の弟子の弟子の毛沢東まで、皆、嘉納治五郎の教育の面の功績と柔道を知って興味を示していた。それなのに、80年後、つまり新しい改革開放のときに、そのとき、私もまだ研究テーマが見つかってないから全然知らない。そういうことを、非常に恥に思いました。その後、留学生問題を研究するようになりましたが、嘉納治五郎の留学生教育を語る前に姿三四郎ブームから解き始めたのは、私のこの一冊の本です。何の問題か、たとえばブーム一つ通して、文化交流中の誤解と無知を発見し、本当の交流はどうあるべきか、或いは歴史を辿らねばいけないのではないかという事で、私はその時代の歴史に手を付け始めたわけです。

そういうことなので嘉納治五郎が留学生を沢山受け入れ、中国の時代の波を立派に受けとめて、と同時にこの波は清朝政府の崩壊に繋がるんですけれども、それも知らないで清朝政府は彼にまず勲章を与えた。もちろん清朝政府が倒れた後も、中華民国も1回嘉納治五郎に勲章を授けたので、倒された側も倒した側も同時に彼に叙勲したことは、すなわち嘉納治五郎が私たちの中国の歴史において、どんなに重要な位置を占めていたかを物語るものだと思います。

それで、大波が起こって沢山の人が来て、その中に魯迅も入っている。毛沢東の先生で、後に義父となる楊懐中も入っている。そして後述の、嘉納治五郎先生と論争を起したその時の言論界のプリンス、楊度という人物も入っていた。

先に、1902年のもう一

つの事を申し上げますと、清朝政府は、嘉納治五郎先生を所望して中国の教育視察に来て下さいと言ったんです。

日本政府はもちろん派遣に応じたが、先生の多くの友達が止めたりした。中国は汚いですから、夏に行くのは大変だと。それに対して、嘉納氏は、私の体は鍛えられているから多少の事は問題ない、夏休みにはしか暇はないと言って、先生は中国に来たわけです。

さてその時の中国訪問について、訪問の様子から嘉納氏の感想や発言に関しては、当時の『教育持論』に何回も掲載され、それがのち『嘉納治五郎大系』に納められて、『国士』の雑誌にも5、6本書かれましたので、詳しくは展開しません。3ヶ月の間に、北京、天津から南は揚子江の武漢、長沙まで視察に回りまわるとすれば、1つは国賓待遇です。北京から、皇帝以下

の要人たちはたくさん名を慕って彼に会っていたが、中で最も長く、回数かさねて彼に会ったのは、日本留学を主催した張本人、中国トップの地方実力派で開明派首領格の張之洞。この人が1898年にこういうものを書きました。

「勸学篇」。つまり福沢諭吉の「学問のススめ」よりも、もっと切迫した中国の情勢を分析して、福沢の個人の自立というよりも、国の独立、国が救われる事を説き始め、新しい学問の樹立を、とりわけその第一着手としての日本留学を勧め、主導したものだ。この人が嘉納治五郎を「我が湖国の恩師です。我が国師です。」国の先生で、と同時に私の管轄下の湖南省、湖北省つまり湖の国から送り出された学生たちの恩師で私の恩師でもある、ということ、嘉納治五郎を最終的に二つの省の中心地、武漢と長沙に接待した。

それは正しく、嘉納先生が言うには「自分の現職としては不相応な待遇を受けた。」という国賓待遇です。その為に朝夕の別なく歓迎攻め、宴会攻め、質問攻めの3ヶ月でした。特に張之洞の場合には何回も深夜まで彼に話を聞き、時には周りの人達を全部退けて密談しました。2人で密談をして、教育のことから国の建設のことまで色々聞かれたようです。国賓待遇を受け、かなり深く内情も聞かされた嘉納先生は1902年10月に帰国後、更に留学生教育に対する熱心さ、そして深い配慮を示すようになりました。

それでは次に彼の留学生教育に臨んだ姿勢、提出した主張、それから発生した問題について話を致します。その基本姿勢は、私が言うには第1点、非常に大局的な見地をお持ちだったんです。大局的見地というのは、彼は色んな文

章に書いているように、「中国の目覚めと改革は中国にとっても世界にとっても喜ぶべきことであつて、決して私たちが日本人が憂慮すべきではない」と同時に政治家たちが自分の狙いを抱いてはいけない。」何故かといいますと、もし中国が列強に分割されたりすると、滅んでしまう。中国にとつて、最大の不幸事であると同時に世界にとつても不幸事。もちろん隣の日本も影響を受ける。その為には彼は、そういった見地と親近感を持って中国留学生教育に臨んでおりました。これは、彼の姿勢の第1点です。第2点、私は研究者として一番感心したのは、彼の教育者としての良識、ひいては老婆心、留学生に示した教育者としての見識、情熱です。留学生が日本に始めた時に、清朝のスタイルでは頭が2/3ぐらいは禿げて、後ろに弁髪をつけていた。それで東京ではすぐに「ちゃんちゃん坊

主」といったような呼び名が流行った。特に町の子供達やガキ共が留学生を見たらすぐに「ちゃんちゃん坊主、ちゃんちゃん坊主」と楽しんで次つたりした。それをうけて嘉納先生は、さつそく1つの文章を書きました。「いかにして外人を待つべきか」という文章。その中で彼が言う、その「外人」とは明らかに清国の留学生を意識しているんですが、外人を呼ぶには「軽侮の称を以てしてはいけない。彼らを敵視、嘲笑してはいけない。」

そういった風潮を彼は留学生を受け入れた早々の1899年に戒めたわけです。その事実には非常に感激しました。「ちゃんちゃん坊主」とか「チャンコロ」(清国徒)とかいう蔑称は、私が研究した精神史の一つの摩擦の種だったにほかならないから、その一事から教育者の非常な熱意を感じられました。彼は大局的

な見地から国策的な政治家の政策とは一線を画したと同時に、清国人を嘲笑してはいけない、罵ってはいけないという事で、当時、日清戦争後の中国人蔑視の風潮に対しても一線を画したのです。

ついでですが、例えばこの2つの校名からも彼が留学生を受け入れてからの気持ち感到非常に良く伝わって感じられる。1899年に始めて付けたのは、「亦楽書院」、朋遠方よりきたる、亦楽しまざりやと、中国の古典(孔子)から取っており、のちに彼が命名した「宏文学院」も曰く有りだった。最初に命名したのは弘文学院、つまり自分が講道館創設の同年に創った英語塾「弘文塾」、自分の懐かしい名前を留学生教育に持ってきた。1902年のことです。ですが、中国では字の、「忌み」の問題がありました。清の乾隆帝の諡名は1字「弘」が入っている。先生は留学生の声を

聞いてか、次の年に宏文学院と変えて、そのちよつとしたチェンジからも、嘉納先生の親切な、笑ましい気の遣い方を伺わせたように感じられるのではありませんか。彼の姿勢の中で大局の見地もあれば、教育者としての一種の老婆心もある、と申し上げた所以です。

もう一方の重視すべき面は、氏の主張です。中国視察の時に当局者達に、そして現場の留学生に説き続けたのは2つ上げられます。

1つは国民教育、一般教育をするのは先決で、根幹となるべきことです。一般国民の教育レベルを上げなければ国は成り立ちませんと。

第2点は、皆さんもご存知の、智育・徳育・体育。それは中国でも今でも使っている言葉で、いわゆる「三育」説。

それはどういふことかと言いますと、張之洞が日本留学を呼びかけた時の最も有名な文

句、或いは日本留学を決定付けた殺し文句というのは、日本は元々小国だった。何故、こんなになにわかに栄えてきたかと言いますと、山縣、伊藤、陸奥、榎本たちは、皆20年前の留学生で、色んなもの学んで帰ってきて、要人になって国がすっかり変わった、強くなった。というわけなので張之洞は、皆伊藤になろう、山縣になろう、つまり、英才教育を掲げていった。その英才教育に対峙しているのは、国民教育なんです。

英才狂句、私たちの世代も含め、はつきり申しますと、古の中国旧来の士人育成を登用の観念、のち私たちの場合はスターリン式の人材観、「幹部」理論を受けた新中国の初期も人材教育、幹部人材の養成教育です。しかし人材とか英才とかでない一般大衆こそ教育を受けるべきではないか。という事で国民全体に教育を施すのが大前提であるべきだ

と。それは中国では今、ようやく普遍的に認識された、普及教育といっています。普及教育も良いが、やはり「国民」の二字を冠るべきで、嘉納さんは国民教育先決だと説いていた。もう1つ智育・徳育・体育、3者を合わせて持っていなければならぬ。彼は言いました。つまり、徳育は、私たち東洋人は偏重しがちです。知育もすぐわかる。しかし体育になりますと、皆弱い。特に中国の士大夫は阿片を吸いながら、古い本を読みながら、さて何が出来る？本をまだ読みこなせないうちに阿片中毒になってしまつて、もう廃人同様、駄目になってしまつて。ですから、彼は中国視察の後、特にこれ、三育の方針とりわけ体育の重視を提唱しました。

嘉納氏は教育者として、1893年、東京高等師範学校の校長になってから約20年

間、日本教育界の元老、重鎮ですね。東洋の既往の体育を重要な教育要件として成り立たせたのは嘉納治五郎の日本教育史における功績にほかならない。それを傾けて、中国の人達に対して力説していたわけである。もっとも、その三育説を始めたのは嘉納先生じゃなくて、イギリスの人だった(とつきにその名前等思い出せなくて申し訳ない)、東洋で唱えたのは嘉納先生、そして、彼と彼の教えた初期の留学生たちを通して中国に広がった。今でも私の子供も孫も、小学校から中高校もこの三育です。以上は、中国の近代教育に非常に重大な影響を与えた嘉納先生の当時の主張で、そして上述した今日的な様子によつても彼の留学生教育は非常に成功したと言わなければならぬでしょう。

嘉納の宏文学院の一番盛んな時、どのくらいの業績があったかといいますと、1例を

あげますと日露戦争の後1906年の学院の在校生、先生、全職員の数です。全職員は174名。学校は本校1つ、分校5つ。第5の分校は信濃分校、つまり長野県にも宏文学院の分校が出来たほどだった。来校した留学生の延べ7,192名。その時は、中国に新しい教育が起こり、学校が沢山作られて、1人でも日本留学生から帰ったら、ただちに学校長に迎えられたりしたので、ですから約数千校の校長先生とか、新学の先生とかが、嘉納氏の下から巣立ち、中国近代初期、20世紀初期の新しい教育を支えたことになる。一例、私事にわたるが、私が高校時代に学んだ中国南京のトップの名門、その旧校舎はそのまま日本式だったです。その校舎の2階で50数年前私が学び、さらに溯って50年前に日本留学に発つ前の魯迅先生が学んでいた。

ところで、現場に戻ってみると、一方に、摩擦も起こります。前述したように1902年、嘉納先生が留学生のこを思いやる老婆心を抱きながら、中国視察へ行った。そのとき、張之洞ら当局の高官達に色々ヒアリングを受けた。

たとえば、具体的に学校をどう起こすか？3年制であるか6年制であるか、科目はどうあるべきかといったような具体的話以外に、うちの留学生たちは、東京で何をやっていのか、自由とか民権とか騒いでいるのではないか。それは、すなわち私たちの為に墓場を掘るような人達が育つのではないか、という類の話ばかり嘉納先生に聞いて、糾して、戦々恐々だった。それで、中国視察から帰った嘉納治五郎は1つ憂慮すべき構図が頭の中に出てきた。つまり、私の教えている学生を含めて今の中国ではごく1

部の外へ出た連中しか頭が開けず、彼らが進歩的ないし過激な言葉をいうので、それで中国に望みがあると自分も思ってしまう。しかし、中国に行ってみたら、留学生のような人はごく少数で、北京の行く先々で聞いたのは皆憂慮する声ばかり。何よりもずいのはそういう上の人達はみんな頑固な上、殺す生かすの全実権を握ってる。そんな構造の下で、ごく1部の人が過激な言論を吐いたところで鎮圧されるか、ぶつかってしまっほかない。激突になって中国は動乱に陥る。それで、せっかくの改革気運もくじかれてしまふのではないか。そんな構図が頭に出来て戻ってきた嘉納氏は留学生に言ったのである。「あなた達の愛国心はよくよく解かる。

中国のことを平和的に進歩の道へ導こうではないか」というような話をした。しかし留学生たちは、初期留学生の言論代表の一人、楊度という人が立ち上がって言葉を返さざるをえなかった。言うには、「まさに中国の為に、清朝政府を倒す為に、改革と動乱にかけて日本に來たわけですから、先生の平和主義、しばらく服従しなさいの服従主義は、私達には到底容認できません。しかも論理的にもこういう人達にはいくらゆすつても目覚めない。打倒するしかないのだ」と。そういうような留学生が主流だったから、宏文学院の中でこのような激しい口論もあった。校長先生との間に。

もう1つ、嘉納治五郎先生は、張之洞達に中国の学制とか、学科とか色々な具体的なアドバイスもした。と同時に中国の新しい学問を建てる、貫くような学説は何を以って

すべきか。ということになると、中国の事を気遣いすぎてか、彼は「清国は儒教を持つて、国を建てるべきである。」という説を方々で言いました。

儒教、孔子様を尊重して国を続けていく。それを聞いて、支配側の要人達はもちろん喜んで賛成していました。しかし留学生達は、たとえば魯迅はこう言いました。「ある日、宏文学院の先生達は、私達を集めて皆さんは孔子の徒です

から、今日はお茶の水の孔子廟へ礼拝に行きましようといいました。私達は大いに驚きました。孔子様にその信徒に愛想をつかしてしまったからこそ、日本へ来たのにまた拝むのかと変な気持ちになって、いま振り返れば私1人ではないだろうと」と。嘉納先生と論争した楊度も言いました。「先生は皆に孔子様、儒教を尊重しろと言われましたが、お言葉を返すようですけれど、中国人の服従根性、奴隸

根性は数千年の古い学術がそうさせたに他ならないものですから、その根性を無くすためにも私達は、孔子様じゃなく、ルソーを学びに日本に来たんです。ルソーを導入しに日本に来たんです。また孔子様を拝むのか」という反発もありました。嘉納先生の好意に対して、ちよつと不幸なことでありますけれども、それはともかくとして、皆尊敬はしております。

次に柔道に関しては、嘉納先生が1902年9月10月に武漢にかなり長い滞在をして張之洞と繰り返し話をしました。1つの会話を紹介します。ある日、張之洞が言いました。「嘉納先生は、文武兼備の達人だということは早くから聞いております。文のこ

とについては、既に教えをここの数日間受けてまいりましたが、武は未だに解からない。先生の創始された柔道は、いかなる武技でありましようか」という話を受けて嘉納先生は長い解説をされた。柔道の起源、柔術を改めて柔道とした理由、自分の修行の来歴、それから体格の発達等について、話しました。柔道と称するのは、私が理を討究して、原理を発見し、原理より術に及ぼし、またその原理の道をもつて、心を修養する法とするから、柔道と称するのだ、と言った。現場に戻してみますと、宏文学院の教育は非常に沢山の特色がありますが、ひとつ重大なのは体育重視、

この半ば臨時的な留学生校にも運動部を設置し、ひいては柔道の指導まで行いました。さっき言ったように彼の最たる功績は、日本の教育システムのの中に体育を教育の要件として確立させたことだが、留学生に対しても最初から体育、智育、徳育と唱えている。もう1つ有名な、1902年のある講演の中で吐いた名文句があった。「その頭を文明化

して、その身体を野蛮化する」(文明其頭脳 野蛮其体魄)。実は、この言葉は20世紀の10年代20年代に、非常にこだました言葉で、いつ誰が発言したかはちよつと断言できません。少なくとも、02年の嘉納演説にさかのぼる事が出来、しかも、扱った留学生の数から見れば一番影響を広げたのはやはりこの時の嘉納治五郎説ではないでしょうか。「体格を野蛮にしましよ

う」という事で1903年3月に全寮生の中の志願者に対して柔道の正式な教育を行いました。それは「講道館牛込分場」の開設で現に今も講道館の資料室の中に正式に分場開設の記録があり、入門した33名のリストがあつて、その中に魯迅も入っていました。孫文に次ぐ黄興という人も含めて、色んな後の有名人が入っています。私が想像するに、先生と学生との間に裸の関係、裸のぶつかり合いが宏文学院

で実現されたのではないか、とりわけあの嘉納大先生が直接技を付けてやる事はあったのか、等しく現場を想像したぐらいです。

さて、講道館の資料室の中で、留学生の試験問題と答案の中で1つ注目したのは、嘉納先生がみずからこの学生達に学期末の聞き取り試験をしたような形跡があった。先生が読んで、学生が書き取りをするような試験。多忙な方だったにもかかわらず、直接に教えたこともあったかも知れない。だとすれば、先生が新設した牛込分場の道場に姿を現したり、或いは誰それ、例えば「姿三四郎」(西郷四郎)ら「四天王」の弟子に代わらせたりして、魯迅たちに、訓練や技をつけてやったことはあったのではないだろうかと思像してもおかしくないでしょう。こういうふうに交流現場に思いをはせざるを得ないのは、私の癖でもあります。

れども、文化交流の史的検証と研究ではそういった現場の検証も、可能であればした方が宜しく、というより原点だといふべきかも知れないと思えます。

もう1つ、毛沢東選集に入っていない、青年毛沢東の1つの文章があります。

「体育の研究」という文章、その中で、色んな体育の重要性とかを並べて説いたけれども、面白いのは、ここでもまず「其の頭脳を文明にし、体を野蛮にする」ということばを引いている。それはともかくとして、毛沢東はこの短い非常に未熟な青年の文章の中では2回も嘉納治五郎の名前を挙げています。どういう文脈だったかと言いますと、毛沢東は、東洋と西洋、世界的に著名な「体育大家」3人を挙げました。1人はアメリカのセオドア・ルーズベルト、2番目はドイツのユージン・サンドウ、近代ボディービル

の父。3番目は日本の嘉納治五郎を挙げました。

彼は言いました。体育について言いますと、現代の文明諸国の中で、西はドイツが1番盛んで、東は日本が盛んである。日本は元々武士道があり、ここ数年来、わが国の影響を生かして、いわゆる柔道を作りました。しかも盛んになっていく、という。さらに毛沢東は、この柔道の問題は「生理を精密に研究し、器官、脈絡を生理学的に極めているのが強みだ。」と言っている。私がこの中で興味を持ったのは2つの問題点があります。一つは、毛沢東は「日本には武士道があり、近年は柔道を発明して・・・」というが、問題は「近年は我が国の影響を生かして柔道を作りました。」という説。実は柔道創始の当初から、嘉納はすでに英文で書いた最初の論文の中で、それを否定しました。

1888年のその英文論文

の中で、柔道史を概観した上で、特に中国の陳元賛、つまり日本柔道は中国伝来説を文献を挙げて否定したのは嘉納治五郎です。

だけども(明末に渡来、名古屋に定住した人で、「陳之賛柔術史」と著されたくらい)中国人は中華思想があつて、ややもすると「日本の柔道は中国の影響だ。」と説き、毛沢東青年もその例外ではありえなかつた。私は嘉納の説を信頼しています。彼は文献を引いて書いていくから。もう1つは柔道は生理を非常に詳しく研究することからスタートしているのが強み、というも毛沢東の着眼点です。嘉納治五郎の柔道創始の始点から見れば、色んな流派を学びとつて、長を取り短を捨てて、その上で力学的学術的な検討を加えた上で道に導いていったのは事実で精髓でもある。その嘉納治五郎の起点の所を、若い毛沢東がよく読んでいると言わな

ければならない。そのことは、異論と正論の偶然な交錯と一致の二点を含めて、いずれも時間的空間的に隔たつていながら古い漢文化圏の文脈をふまえた一種の議論と対話だと理解してもよろしいんじゃないか。

毛沢東も古い漢文化圏の論理をふまえて、何でも中国起源説。しかしそれを非常に意識した嘉納治五郎は30年前から、確信的にまずそれを否定しかかる。

もし、二人を一緒の時代に生きさせて対話でもさせてみたら喧嘩になるかも知れませんが、ともかく、中華思想などめぐって意識し合っていた点は、たまたまなく面白い。毛沢東はさっきの言葉の中で「西はドイツ、東は日本、日本はすなわち武士道あって柔道を生み、盛んになった」という点もちよつと注目したい。毛沢東はこの文章を書いたのは1917年です。この時には

まだごく自然に武士道に触れて、全然悪いイメージはなかった。だが後になって大はあの侵略戦争、小はそれに至るまでのたくさんの衝突や事件とか、大陸浪人の暗躍とかあって、ついに中国では武士道と言え、その語を教室などでは取り上げる事は出来なくなつてしまった。と言いますのも、私事にわたるが、たとえば小さい時子供のお尻をちよつと叩いたら、すぐ妻は「あんた武士道、あんた日本語を習っているからね」とかみついてくる。武士道とは何か、武骨で切れやすく、大小を差してすぐ喧嘩を起すというイメージ、大陸浪人のイメージ。

青年毛沢東の時代と、彼の十数年後に、学者として正面から武士道を紹介したりした者もいたが、後の戦争の為に、武士道はイコール暴力、野蛮、よくても喧嘩早いということになつたんだ。話を最初に戻

して、『姿三四郎』テレビドラマの功績があつたとすれば、この矢野こと嘉納先生のイメージは印象深く中国人に影響した。つまり、今までの「ブシドウ」のイメージとは全く逆で、この姿三四郎の先生によるイメージチェンジはあつたと思います。

問題はこれから後に、私達研究者と日本側の協力で、こういう事に正面から取り組むか、意識して取り組むことが出来るかどうかの問題です。

それに関して今回、一番大きな業績と思われるのは、この度、山下理事長はじめNPOの絶大な熱意と尽力によりわが国の青島の地に立派な心と技を鍛えさせる施設が出来て、これからの中国一般に上述のことを再認識させることが出来れば、私の日中文化交流史の研究者としての遺憾と、一方の柔道に対する不勉強も補われるのではないかと思いません。ありがとうございます。

「柔道を通じた日中交流に思う
・ 自他共栄の理想をもとめて」

山下泰裕

巖先生、貴重なお話をありがとうございました。熱のこもったお話から嘉納治五郎師範の思いが伝わってきて、胸が熱くなりました。我々は、もっと柔道創始者の思想と行動に学ばなければならぬと改めて強く感じました。次第です。

さて、今日は平日の大変お忙しい時間帯にも係らず、平素からお付き合いのある方々、JOC法人の会員など多くの皆様方にお集まり頂き、感謝申し上げます。私の話しは、いま実際に取り組んでいる日中交流の活動を中心に進めてまいります。

青島に日中友好の目的で柔道館が設立される

実は一昨日、中国の青島へ行ってきました。念願の日中友好青島柔道館が二月25日の日曜日に落成したのです。私も落成

式に出席し、その日のうちに帰ってきたのです。翌26日に、フジテレビ・朝6時のニュースで流れましたので、まずご覧ください。

(ニュースを録画で流す)

日中交流の拠点にしよう
と柔道の盛んな中国の青島に道場を開設し、25日記念式典が開かれました。青島市にオープンしたのは広さ400㎡の日中友好青島柔道館です。大学で教鞭をとる傍ら柔道を世界に広める活動を行っている柔道家、山下泰裕さんが外務省の草の根無償支援協力プログラムから、100万円を受けて開設しました。「柔道を通じて日本の心を伝えたい」という山下さん、いま地元中国の子供達に柔道を指導しています。山下さんは、「柔道が世界に広まることは、日本に関心を持つ人が増えることになり、それが日本に対する信頼や理解に繋がる」と言います。

※山下のコメント:「青島の方々とは日本の方々の交流、柔道を通して日本の心を学ぶ。そういうものが進んでいく。そんな気がします。大変嬉しいです。」

落成式の模範演技で、子どもたちに投げられ慣れない受身を沢山取りまして、翌日から腰や肩が若干痛んでおります。(笑い)

1点だけ修正させていただきます。柔道館は私が造ったものではありません。日本のJOC・草の根無償支援により、日本外務省、北京の日本大使館、そして青島市、及び中国柔道連盟の協力で作られたのです。私は、仲介の労を取っただけです。そこだけです。ね、ちょっと誤解されているようなので訂正します。

ところで、私が日中交流に関わりを持ったのは2004年の月です。当時、国際柔道連盟(IJF)の教育コーチング理事をしており、

理事会が中国の上海で開催されたこと。会議の後で中国柔道連盟の宋副会長から次のような依頼を受けました。

「北京オリンピックまで4年半しかない。4年という月日はあつという間です。中国の女子柔道はこれまで沢山のメダルを取っており、何も心配はしていません。しかし男子柔道のことを考えると夜も寝られない時がある。男子強化の為に協力をお願いしたい。」

この時期、日中関係は険悪なムードでした。中国で開催されたサッカーの試合で日本チームがいろいろと問題に巻き込まれました。

このスライドにありますように、中国は、女子柔道がオリンピック種目になった第1回バルセロナ大会から毎回金メダルに輝き、他のメダルも沢山獲得しています。しかし、男子のメダルは、まだ1個もない。ですから、私は、次のように答えました。

「私に出来る事は限られていま
す。しかし、私や柔道関係者の
みならず日本でも多くの方々が
北京オリンピックの成功を願っ
ています。出来る限りの応援を
しましょう。」

これが始まりです。

中国男子柔道の競技力向上を支 援

同じ頃、経団連の奥田会長(ト
ヨタ自動車会長)との対談をま
とめた『武士道とともに生きる』
という本を出版する企画が進ん
でおりました。何度かお会いし
て、柔道を通して学んだことや
柔道への思いを話し合っていた
のです。その中で、奥田会長か
ら、雑談でしたが、いま非常に
日中関係が悪いということで、
具体的な例をいろいろと挙げな
がら、心配されることがありま
した。

私の方も上海での話をしまし
た。すると、奥田会長は、「山下
さん、それは良い事だ。是非や
りなさい。僕も応援しよう。」と、

言われたのです。結局、トヨタ
自動車、新日鉄、全日空、ロー
ソンの4企業の協力によって北
京オリンピックに向け中国男子
柔道の支援がスタートしたわけ
です。

2006年の一月から中国男子チ
ームを日本に受け入れ、その強
化練習を手伝っています。昨年
は何と年間5ヶ月も、日本で強
化合宿をはりました。主として
東海大学が中心となっています。
このスライドは、2006年一月
の嘉納治五郎杯に招待したとき、
大会後の合宿、中国男子チー
ムを招いて歓迎会をした時のスラ
イドです。



また、この写真は、受入れて
いる宿舎です。十分なお金が無
いものですから、学生寮の部屋
を7部屋ほど借りています。来
日した選手たちは、ここで合宿
生活を行うわけです。

実際の指導について、私も多忙
なものですが、なかなか関わ
れないのですが、元世界チャン
ピオンの国際武道大学・柏崎克
彦教授、東海大学の光本健次教
授といった先生方が、時間を割
いて指導されています。また、
これは中国側の要請ですが、せ
つかく日本に来たのだから、柔
道用語や日常会話を学びたいと
いうことで、日本語も勉強して

います。その写真です。

中国男子柔道に関しては、オ
リンピック等で活躍できない理
由として、やはり指導者の問題
があるということに行き着いま
した。そこで、光本健次先生が
大学の研究休暇を半年間取られ
ることをお聞きし、中国チー
ムの本格的指導に当たっていただ
くことになりました。光本先生
は、当ZPO法人の事務局長。光
本恵子さんのご主人です。当初
の研究計画では、アメリカなど
英語圏で研究することを考えて
おられたのですが、私たちが、
「何とか中国に…」と話して、
「じゃ、俺が行くか。」となった
わけです。

光本先生は、かつて高校柔道
界で日本一のチームを育成され、
またスイスで指導されたときに
はオリンピックチャンピオンを
育てた実績を持っておられます。
今年の〇月頃から来年〇月まで
指導に出られます。これは、中
国から送られてきた写真です。
真ん中に立っているのが光本先

生です。身長も約175cmですが、両脇の中国人選手の大きいこと。道場は500畳ぐらいあります。中国に、いかに大きい選手がいるかということ、この写真を送って頂きました。

これは、中国チームと光本先生と一緒に写ったものです。



中国で、光本先生が指導され、少しずつ成果が上がっています。東アジア大会では、全ての選手

がメダルを獲得したという情報が入ってきております。さらに、今日の講演会に合うタイミングで、朝日新聞に光本先生を扱った記事が出ました(2007年11月24日付「全身で伝える柔の心」)。

日本の心を世界に伝えたい

中国チームを受け入れて非常に感心するのが、彼らの礼儀正しさです。何の為に日本に来ているのか。もちろん北京オリンピックに向けてですが、それだけじゃない。日中の文化交流であることを、よく理解しております。非常に礼儀正しいのです。

そこで一つ、嬉しいような、見方によっては恥ずかしい話をしたと思います。

大学の近くにサウナ付スパー銭湯があります。私も時々利用しています。中国選手も疲れを癒す為に行っているようです。ある日、私がサウナに入っていたら、顔見知りの人が入ってきました。そして、私を見つけるのと、「最近、よく中国の選手を見

かけるが、彼らは礼儀正しいねえ。本当に感心するよ。」と、言われるのです。ここまではよいのですが、続けて言うには、「それに比べて、今の日本の若い学生たちは…」と。

私は、中国選手を褒められ、東海大学の学生をけなされ、果たして喜んでいいのか、悲しんでいいのか分からなくなりました。

私は、講演のときに、柔道を通じた国際交流について、つまり柔道を世界に広げながら、柔道を通して日本の心を世界に伝えていくということに触れます。中国柔道への支援についても、柔道を通して異文化理解を図るという考え方が根底にあるわけです。

中国柔道への支援に関しては、日本の方々の反応が全く二つに割れます。面白いですね。一つは、「山下君、よいことやっている。素晴らしいことだよ。」という評価。

もう一つは、「おいおい山下君、

そんなことをしているのか。北京オリンピックで日本選手が中国選手に負けたらどうするんだ。」というもの。どちらも正直な感想と思っています。そこで、私の答えは、いつも同じです。

「私は、是非日本と中国が北京オリンピックで対戦して欲しいと願っています。何故か。だっただけで対戦するということはお互い負けていないということでしょう。男子7階級、女子7階級のうち、1階級も対戦がないということ、双方共に最後までで勝ち上がらなかったということ。対戦の前に、どっちかが負けたということ。私は、もちろん日本を応援します。しかしそれ以上に日本と中国の選手が是非1組でも多く、北京オリンピックで対戦して欲しい。それはお互いのチーム、選手がそれまで負けてこなかった証なのです。」

砂浜から世界へ

話は変わりますが、北京オリ

ンピックに向けて中国男子柔道の支援が具体的に動き始めたことを外務省の私の知り合いの方が素早くキャッチされました。是非会って話がしたいとの連絡を受けたのです。2005年の9月頃と記憶しています。次のような話をしました。

「山下さん、北京オリンピックに向けた中国男子柔道を支援しているでしょう。よいことをやっていますか、これは短期だよ。目先の事だよ。ね。もうちょっと中長期的なことを柔道で出来ないかなあ。」

そこで出てきた案が、「中国でも僻地或いは田舎、奥の方へ行くと1000万円の草の根無償支援で学校が建つ」という話。そして、最終的に「それでは中国に柔道場を作ろう。我々NPOを交流しながら柔道を通して交流を地道に重ねていこう」ということで合意したのです。通常のODAの場合、政府間で億単位のお金が出ますが短くて

も3年から5年かかります。ところが1000万円以内であれば現地の日本大使館の判断で出来る。よいことであれば、すぐにも動くことが出来る。そして、中国で大変熱心に柔道普及に取り組んでいるのが青島であるという話を聞きまして、私と事務局長の光本さんが2005年11月に青島を視察しました。

この写真を見て下さい。砂浜で柔道の練習を行っています。青島と言いますと美味しいビールが有名で、海に面して砂浜が美しい。30年くらい前のことですが、柔道をするにも畳がない、道場がない。ですから砂浜から柔道が始まったのです。今年11月24日、25日の両日に第1回青島国際柔道大会が開かれましたが、キャッチフレーズは「砂浜から世界へ」です。

最初、畳がないので砂浜で練習していたわけですが、それを見た警察官は、若者たちが喧嘩していると勘違いしたそうです。それから政府の要人もその光景

を目にして感心したそうです。やがて青島市の政府から少しずつ理解を得て認められ、国際大会を開催するようになり、青島出身のオリンピックメダリストも生まれて、現在の形になりました。



昨年の二月、青島での日中友

好青島柔道館開設の為の調印式の写真です。

現地からの要請で、この日中友好柔道館は日本式道場にした、日本の運営を行いたいということでした。今年の9月には、NPOの橋本副理事長と柏崎先生が現地を事前視察し、道場の運営方法などについて、色々と意見交換をしました。また、指導者を日本で学ばせて、日本の指導法や運営方法、日本語などを研修させたいという要請がありました。女性の王華さんをNPOで受け入れました。東海大学において日本語や柔道指導法などの勉強、それから柔道クラブでの現場研修を行っています。

青島国際柔道大会の華々しいオープニングセレモニーに柔道衣装の子供たちが約100名位参加しました。これは、私が撮った写真です。

大変嬉しかったのは、子供たちが皆、「中日友好青島柔道会館」という大きなゼッケンを付けて、胸にはバッチも付けておりました。青島市の政府の方々や、市の柔道関係者の方々の、この会館に寄せる熱い思いというのが伝わってきました。翌日の25日に日中友好柔道館は開館しました。ここにありますが、正面には大きな字幕と、中国と日本の国旗が掲げられています。道場の壁には、嘉納治五郎師範の写真とその教えがしっかりと飾ってあります。正面に



「中日友好青島柔道館」、そして入った右側に大きく「精力善用、自他共栄」の、嘉納治五郎師範が掲げた柔道の理想が大きく書かれておりました。



大きな道場ではありませんが、日本にも無いような素晴らしい日本スタイルの柔道会館として、そして柔道創始者の精神、理念がここに来る子どもたちにとっておられます。私も胸が熱くなつた次第です。通常、この種の支援は、その

建物を作ったら相手に感謝されて終わりですね。しかし、少なくとも柔道に関する支援は、ここで終わってはいけないと思います。NPO法人では、出来上がってからがスタートであると思っております。学生には夏休み、春休みが十分ありますので、この時期を利用して学生ボランティアを柔道館へ派遣する。また、青島には日本の企業も進出し、日本人学校もある。現地の日本人会の子供たちとの交流、柔道を通じた交流が出来るのではないかと思います。この柔道館を通しての日本文化の紹介も出来ます。以前、青島で私がお会いしたのは、現地の日本人会会長の方でした。せっかく青島に柔道館が建ったわけですから、日本人会との間で上手く交流したい。そうでなかったら効果は半減以下と思う。柔道館を柔道で使わない時には、柔道館を利用しながら日本文化を発信する。日本人会の方々にご協力いただくことも可能だろうと思つてい

ます。

そのことで実は今日、1本の電話がかかってきました。青島へ日本人の合気道の先生が行かれたそうです。その先生は、以前徳山大学の教員でした。現地で合気道普及に携わっているけれども、道場がない。出来たら、柔道が使わない時間帯でいいから、使わせてくれないだろうかというお話でした。私個人の思いは、柔道を中心としながら、この小さな施設が日本文化を発信する場になる。これらを通して青島の人たちと、日本人との心の交流が育んでいければと思つていきます。

次は南京に

実は、青島の話が少し具体化した頃に、南京におられる日本人の方から「是非会いたい、会って話を聞いて欲しい。青島に柔道館を作るらしいけれど、是非次は南京に作って欲しい。」という連絡がありました。私は、「まだ青島の話も具体化してな

いのだから、そんないきなり二つ目は無理ですよ。青島が成功してからですよ。」と、今思えば、ちよつと冷たかったかなと少し反省をする反応でした。

しかし、昨年、調印式に日本大使館に同行し、大変喜んでおられました。そして私に、「山下さん、素晴らしい企画に参加出来てうれしい。これもつと作りましようよ。」と、話されました。

調印式が終わった後、井出公使から中国柔道連盟会長に「次も考えていますが、どこがいいですか。」と質問されたところ、「是非、南京（ナンジン）に作って頂きたい。」と言われたそうです。日本人として、また中国人にとつても、なかなか癒せない心の傷を覚える場所に柔道場が出来て、その交流を通しながら、お互いが異文化交流しながら、お互いを理解しあつていくようになれば素晴らしいなあと思つています。何とか青島の柔道館を成功させて、是非南京に

柔道場を開設する方向で、引き続き仲介の労を取つていきたいと思つております。私は、体がそんなに大きいわけではありませんが、どうも押しはかなり強いようです。この武器を生かしながら、日中の友好を進めていきたいと思つております。

中国柔道には、まだまだ抱える課題があるみたいです。中国では、段や級の制度がありません。それから指導者育成の問題も、中国の柔道がこれからレベルアップしていくには必要ではないかと思つています。こういう事に関しても、もし要請があればNPO法人として、出来る範囲の中で支援を行つていきたいと思つています。

『姿三四郎』を通して日本の心を伝えたい

厳先生から姿三四郎の話が出ましたが、実は、在ブラジルの日系柔道関係者の方々のご尽力によりまして、今年10月に『姿三四郎』の本のポルトガル語訳

が出来上がりました。国際交流基金からの支援もありました。

私と奥田会長が最初に話をしたのは、2人の対談本ではなく『姿三四郎』のことでした。

奥田会長とは日口賢人会議開催当日の朝、朝食会場でお会いしました。そこで、奥田会長が「橋大学在学中に柔道に打ち込まれていたことを知るとともに、奥田会長から、「あの頃、姿三四郎の本を読んで柔道に燃えた。」という話を聞きました。

奥田会長が、「ところで姿三四郎の本は英語になって出ているのかね。」と尋ねられました。

「いや、出ていません。」
「何で出さないのかね。日本の心を、生死をかける戦いを通してながら敗者を思いやる日本人の心、生き様を、これこそ世界に向けて発信していくべきではないか。是非やりなさい。僕も応援するから。」

そのような会話でしたが、何せ会議前の朝食のときの話ですから、大変失礼な話ですが、話

半分程度に聞いておりました。ところが、部屋に戻ると奥田会長付の秘書の方が来られました。「奥田が言つておりますので、トヨタも応援します。是非やつて下さい。」

その後、経団連のお付の方も来られて、「経団連も応援します。是非やつて下さい。」と言われるのです。ところが、これがなかなか難しい。翻訳しても、当時の時代背景とかいろんなものが解からないと、さっぱり外国人へは伝わらない。英語の翻訳が大変に困難であるということが解かつて、途中から話が対談本を出版することになったのです。

今日、この会場に来る前に、奥田相談役に会つて参りました。そこで私は申し上げました。「ポルトガル版が出来ました。このポルトガル版から英語への翻訳は難しくないということですので、是非NPOが間に入つてやりたい。費用の半分はNPOで出します。残りの半分をトヨタの方でご支援頂けないでしょうか。」

その場の即答で、側におられた社会貢献部の方に、「君らでやりなさい。」という話になりました。社会貢献部の方からは、「中国語ではないのですか。」と言われま

した。厳先生の話にもありましたが、私も〇年前に中国に行った時、「いやあ、姿三四郎のドラマをやっている時には、泥棒の仕事がなくなった。」と言われたのです。何で、姿三四郎のテレビ放映と泥棒の仕事が関係するのだろうかと思議に思ったら、皆が家に帰ってテレビを観るから、その間は泥棒が働けないのだそうです。

また、奥田会長から、ロシアの話も出されました。プーチン大統領から私に（少し交流があります）「山下さん、姿三四郎の映画観たことありますか？面白

の労を取って、何とか時間はかかりますけれども、実現の方向へ向けて動いていきたいと思っております。

ブラジル講道館有段者の方々の熱意には、本当に頭の下がる思いです。リオで私が、今まで柔道の試合では外国人に一回も負けたことのない私が、HCOの選挙で完膚なきまでに一本負けした後、ブラジル柔道の皆さん方から言われました。

「この本が出来上がる前のゲラを現地のブラジル人弁護士や色んな連中に見てもらったけど、皆物凄く感動するんだよ。」

この生死をかけた戦いを通しながら、成長していく。或いは、敗者に対して心を寄せて一緒に悩む。単なる小説ではない。限りなく実話に近い。これは我々が忘れかけた、日本の心というもの

に思っております。

迷うことはない、草の根交流を推進しよう

実はこのHCOの活動は、いまは若干というか大部分、中国とロシアへの支援です。外務省や民間企業の支援が得やすいんですね。しかし、国際柔道連盟にはHCOの国や地域が加盟してお

りません。非常に貧しい国々も多いもので、特定の国に偏っているものでしょうか、若干悩んでおりました。

〇二年前に、中曽根康弘元総理が神奈川県二宮町にある徳富蘇峰記念館を訪問されました。そのとき、私も一緒に2時間半位、ゆっくり食事をしながら話を伺う機会があったのです。中曽根元総理と、こんな話をしました。

馬鹿な。」と、思いました。

「あるのかな、柔道の理合って、そういうのが。」

暫く考えて思いついたのが、「先生、それは、柔道に引かば押せ、押さば引けという言葉があります。」柔道を知らない方の為に、説明しますと、押そうと思ったら最初はまず引きなさい。引くと引かれると思つて、重心を後ろに持つていく。その後ろへ持つて行く時、合わせて押してやると、小さな力で相手を押す事が出来る。また、引こうと思つても引けない。まず、押し

てあげなさい。押されまいと思つて重心を前へ持つてくる。その前に持つてくる力を利用すると前に引けるといふ理屈です。「そうそう、それだよ。それを毛沢東は利用していたのだよ。」

と、元総理は言われました。それでも私は、心の中では「そんな馬鹿な、そんな事があるはずがない。」と思つていました。ところが、〇年前に、2005年二月に青島で、現地の方から教

えて頂いたんです。毛沢東の最初の妻のお父さん、義理のお父さんが、日本の宏文学院、つまり嘉納塾で学んでおられた。そのお父さんの影響があった。毛沢東は嘉納先生について勉強していた。毛沢東の「体育論」という本の中でも、嘉納先生の考え方を紹介している。その話を聞いた瞬間に、「柔道の創始者も、長い歴史の中で、色んな文化を受け入れ学んできた中国、その交流を大事にされていたのだ。」と、気付きました。嘉納師範は、中国との交流のために多くの借金を背負われたということも聞いております。

それを聞いた時、「何も俺が迷う事はない。近くて遠い国だし、近くて近い国、もっともっと色んな意味で中国の為、日本の為に世界の為に協力をしていかなければならない。柔道という限られた分野だが、これからも草の根レベルの、市民レベルの交流をしていかなければいけない。」そういうふうにした次第

です。そして、口には出さなかつたけれども、心の中で、中曽根元総理からは大変貴重な情報を教えて頂いたのに、「そんな馬鹿な」と疑った自分を反省した次第です。

このような活動が出来るのも、このNPO法人を支えて下さる多くの方々のお力があってだと思っております。今日、お集まり頂いた方々、そして常日頃からNPO法人に対してご支援いただいている方に心から感謝の気持ちをもちまして、私の話を終わらせて頂きたいと思えます。

ご清聴ありがとうございました。